

美術博物館だより

News Letter From Tomakomai City Museum



坂東史樹《苫小牧埠頭西 No.1 倉庫（インスタレーション《その仔犬をポケットに入れよ、旅を続けよう》より）》(2015)

目次 Contents

01 特集 1 企画展

NITTAN ART FILE2：クロスオーバー

02 特集 2 特別展 トヨタ自動車北海道株式会社創業25周年記念事業 水から未来を紡いで 20世紀美術の創造

02 クローズアップ 100回目を迎える大学講座

03 報告 平成29年度事業記録

04 展示室の貸出し事業

04 勇武津資料館通信

05 コラム 特別展「柳原良平の海・船・港」展覧会余滴一駅を彩った壁画の存在

05 コラム “氷期の生残者” たちに想いを馳せて
—企画展「雷鳥・四季を纏(まと)う神の鳥—高橋広平写真展—」を開催して

06 コラム ミニ企画展 「昔の道具〜火と人々の暮らし」

06 ミニコラム —博物館でまなぶ— コイノボリ大火関係資料について

06 埋文センター活動報告

07 館長コラム/平成30年度展示会情報

07 表紙について 展示室から 編集後記

特集 1
企画展

NITTAN ART FILE2
クロスオーバー

■ 2017年6月17日(土)～7月17日(月・祝)



セクション1 展示風景



セクション3 展示風景



セクション5 展示風景

当館の立地する北海道胆振・日高（日胆）地方ゆかりのアーティストや、その地域をモチーフとする作品に焦点を当てる展覧会シリーズ「NITTAN ART FILE」。その第2弾として、「クロスオーバー」すなわち「異なる領域の融合」をテーマとする企画展「NITTAN ART FILE2：クロスオーバー」を開催しました。

本展では、全体を以下の5つのセクションに分け、ジャンルを横断した表現活動を展開する5人のアーティストを紹介。セクション1で紹介した美術家・千代明（1957～）は、板金技術の応用により構成された色彩豊かな立体作品や、内部に光を湛えるかのような視覚効果を有する平面作品を展示空間にインストールすることにより、私たちが住まう現実世界に内在する“マクロコスモス（大宇宙）”と“ミクロコスモス（小宇宙）”とが融合するかのような作品世界を提示しました。セクション2で紹介した映像作家・佐竹真紀（1980～）は、苦小牧のランドマークである王子製紙株式会社苦小牧工場の煙突を様々な角度から撮影し、それらをコマ送りする写真アニメーションの手法によって、同工場の煙突を“軸”に都市という存在そのものが旋回するかのような視覚的効果をもたらす映像作品《Pivot》（2017）を制作。また、セクション3で紹介した音響作家・中坪淳彦（1966～）は、駅前の再開発を機に記録として残された昭和40年代の苦小牧の街並みの映像資料を源泉としながら、時間軸のなかにおける都市の新陳代謝をテーマとす

るノスタルジックな音楽を掛け合わせ、「映像」と「音楽」という両者の領域を横断するショートムービー調の作品《都市の記憶》（2017）を制作しました。さらに、画家・加藤広貴（1972～）の油彩作品を主として展示したセクション4では、創作活動の源泉や画家としての“個人史”を抽出することをねらい、制作資料や写真、幼年期のスケッチなども紹介し、画中に展開するノスタルジーとそれを描く画家の“個人史”とが交差する世界へと観覧者が入り込む場となることを意図しました。そして、セクション5では一貫して空間性を意識したインタラクティブな作品を制作し続けている美術家・松井紫朗（1960～）の作品を紹介。「宇宙」という広大な世界に対峙する私たちの存在自体への問いかけを誘発する「装置」としての機能を果たす巨大なバルーンおよび伝声管を彷彿とさせる作品などを展示することにより、一貫して松井が追求するテーマである「アチラ」と「コチラ」ないし「見る」、「見られる」という関係性の交差が際立つ結果となりました。

クロスオーバーという字義には、「交差」のほかに「遺伝」ないし「架け橋」という意味が含まれています。地域に根差した独創性の高い表現活動を紹介する本展覧会シリーズの開催が、人々と作品、そしてアーティストとの間における「架け橋」となり、やがて多様な展開をみせる現代美術を身近な存在として体感しうる機会となれば幸いです。

細矢 久人（主任学芸員／美術）



セクション2 展示風景



セクション4 展示風景

特集 2

特別展

トヨタ自動車北海道株式会社創業 25 周年記念事業

水から未来を紡いで — 20世紀美術の創造 —

■ 2017年7月27日(木)～8月27日(日)



特別展「水から未来を紡いで 20世紀美術の創造」は、苫小牧に本社を置くトヨタ自動車北海道株式会社の創業 25周年を記念した展覧会です。同社はこれまでもおよそ5年おきに地元に対する社会貢献活動の一環として当館を会場にした絵画展を開催しています。本展では、モネやルノワールなどフランスを中心とした19～20世紀の著名な画家たちの34点の絵画作品を展示し、その多彩な表現の数々をご観いただきました。

展覧会を主催するトヨタ自動車北海道が今回掲げたキーワードは「水」。自然豊かで海にも面する苫小牧は「水」とは切っても切り離せない関係にあります。近年の苫小牧はとまチョップ水が人気なように、「おいしい水道水」にも選ばれる水がきれいでおいしいまちとしての一面ももっています。水から未来を考えていくという今回のテーマは、苫小牧らし

いものであったのではないのでしょうか。川や海、雨や雲、氷に雪…水は姿を変えて私たちの生活に深くかかわっています。どこにでもありますが、なくなれば全ての生き物が生きられなくなる存在、そして時に自然の中で脅威になることもあります。一滴の水が大海を作り出すように、多彩な作品を通じて想像と創造の広がりを迎えることができました。

展覧会は28日間という短い会期ではありましたが、10,060名の方々にご来場いただき、夏休みということで、地元の子供たちが家族と共に足を運ぶ姿も多く見かけました。出品作品は日ごろ公開されていないものも多いためか市内外からの来館者の方も目立ち、改めてヨーロッパの近代絵画に対する人気の高さをうかがえた機会となりました。

福田 絵梨子 (学芸員/美術)



オープニングセレモニー



クローズアップ

教育普及活動

300回目を迎える大学講座

当館大学講座は昭和61(1986)年7月に開講し、平成30(2018)年10月に通算300回の節目を迎えます。講座は前年に開館した苫小牧市博物館の教育普及事業の一環として、郷土についてより深く学ぶことを目的にはじめられました。市民を対象にした年9回登録制で、テーマは主に北海道および苫小牧に関する自然・歴史・芸術文化に設定しています。これまで道内各地の研究者や歴代の職員など、のべ250人以上が講師を務めました。定員は会場の変更により80から

100人へと増加していますが、開講から31年間、一度も定員割れをした年がなく、近年はおおよそ1.5倍の応募が続いている状況です。また、受講生は生涯学習社会を反映して60代から80代までが大半を占めています。一方、男女の構成比は当初、男性が女性を上回っていましたが、ここ数年は逆転しています。例年実施しているアンケートからは、受講生が苫小牧を中心に北海道全体について興味関心を持ち、継続して受講したいと考えていることが伺えます。こうした声に耳を傾けながら、より充実した講座を実施していきたいと思えます。

武田 正哉 (主査(学芸員)/歴史)

報告

平成29年度 事業記録

《特別展》

■トヨタ自動車北海道株式会社創業 25 周年事業

「水から未来を紡いで 20 世紀美術の創造」

会期：平成 29 年 7 月 27 日（木）～8 月 27 日（日）

入場者：10,060 名

主催：トヨタ自動車北海道株式会社

共催：苫小牧市美術館

協力：トヨタ自動車株式会社 / 北海道立近代美術館

後援：苫小牧市 / 苫小牧市教育委員会 / 北海道新聞苫小牧支社 / 株式会社苫小牧民報社

①オープニングセレモニー

日：7 月 27 日（木）

参加者：90 名

②科学のびっくり箱！なぜなにレクチャー

主催：トヨタ自動車北海道株式会社

日：8 月 11 日（金）

参加者：102 名

■柳原良平の海・船・港

会期：平成 29 年 9 月 9 日（土）～11 月 12 日（日）

入場者：4,080 名

協力：横浜みなと博物館 /

船の科学館「海の学び ミュージアムサポート」 /

苫小牧港開発株式会社 / 独立行政法人海技教育機構 /

苫小牧北倉港運株式会社 / 苫小牧港管理組合 /

株式会社美術著作権センター / 株式会社商船三井 /

商船三井フェリー株式会社 / 苫小牧市美術館友の会 /

苫小牧市博物館友の会

後援：苫小牧市商工会議所 / 苫小牧信用金庫 /

北海道新聞苫小牧支社 / 株式会社苫小牧民報社 / 株式会社三星

①オープニングセレモニー

日：9 月 9 日（土）

参加者：88 名

②ギャラリーツアー（全 4 回）

参加者：38 名

③知ってびっくり！海・船・港のこと

日：11 月 3 日（金・祝）

講師：苫小牧港開発（株）株式会社コンシェルジュ、榎戸克美氏

参加者：60 名

《企画展》

■恐竜の玉手箱

会期：平成 29 年 4 月 29 日（土・祝）～6 月 4 日（日）

入場者：5,256 名

特別協力：神奈川県立生命の星・地球博物館

後援：苫小牧信用金庫 / 北海道新聞苫小牧支社 /

株式会社苫小牧民報社 / 株式会社三星

①子どもむけギャラリーツアー（全 19 回）

参加者：1,298 名

■NITTAN ART FILE2：クロスオーバー

会期：平成 29 年 6 月 17 日（土）～7 月 17 日（月・祝）

入場者：1,972 名

協力：NPO 法人 CAPSS / NPO 法人榎前 arty プラス

後援：苫小牧信用金庫 / 北海道新聞苫小牧支社 /

株式会社苫小牧民報社 / 株式会社三星 /

北海道新幹線 × nittan 地域戦略会議

①中坪淳彦パフォーマンス

日：6 月 17 日（土）

参加者：32 名

②アーティストトーク

日：6 月 17 日（土）

参加者：30 名

③ミッション「手に取る宇宙—Message in a Bottle—地上ミッション」

講師：松井繁朗氏（彫刻家・京都市立芸術大学教授）

日：6 月 18 日（日）

参加者：36 名

④ギャラリートーク（全 2 回）

参加者：40 名

■雷鳥・四季を纏う神の鳥—高橋広平写真展—

会期：平成 29 年 11 月 23 日（木・祝）～平成 30 年 1 月 21 日（日）

入場者：2,868 名

協力：株式会社苫東 / 長野県大町山岳博物館 /

苫小牧市立啓北中学校 / 苫小牧市立啓北中学校 PTA /

苫小牧写真連盟 / 苫小牧市美術館友の会

後援：苫小牧信用金庫 / 北海道新聞苫小牧支社 /

株式会社苫小牧民報社 / 株式会社三星 /

富士フィルムイメージングシステムズ株式会社

①オープニングセレモニー

日：11 月 23 日（木・祝）

参加者：108 名

②座談会「ネイチャーフォトの魅力を対談するタベ」

講師：水越武氏（ネイチャーフォトグラファー）、

高橋広平氏（雷鳥写真家）

プレゼンター：林広志氏（苫小牧写真連盟）

主催：苫小牧写真連盟

協力：株式会社苫東

日：11 月 23 日（木・祝）

③授業公開 おかえり先輩

講師：高橋広平氏（雷鳥写真家）

主催：苫小牧市立啓北中学校 / 苫小牧市立啓北中学校 PTA

日：11 月 24 日（金）

④視覚障がい者ソーシャルビュー

主催：苫小牧市障がい者パソコンボランティア友の会

日：12 月 3 日（日）

参加者：22 名

⑤アーティストトーク（全 4 回）

参加者：257 名

《ミニ企画展》

■昔の道具～火と人々のくらし

会期：平成 29 年 9 月 9 日（土）～11 月 12 日（日）

入場者：4,080 名

①ミニ企画展示解説会（全 4 回）

参加者：19 名

②昔のくらし体験～昔のアイロンをかけてみよう～

日：9 月 30 日（土）

参加者：23 名

③古文書解説講座「ストーブ事始」

日：10 月 7 日（土）

参加者：18 名

《収藏品展》

■川上澄生と北海道

会期：平成 29 年 4 月 29 日（土・祝）～6 月 4 日（日）

入場者：5,256 名

■苫小牧市美術館所蔵名品選

会期：平成 30 年 2 月 3 日（土）～3 月 18 日（日）

入場者：1,830 名

①ギャラリートーク（全 2 回）

参加者：52 名

②こども向けギャラリーツアー

日：2 月 24 日（土）

参加者：9 名

③視覚障がい者ソーシャルビュー

主催：苫小牧市障がい者パソコンボランティア友の会

日：3 月 17 日（土）

参加者：26 名

《中庭展示》

■中庭展示 vol.9 松井繁朗—channel—

会期：平成 29 年 4 月 29 日（土・祝）～8 月 27 日（日）

■中庭展示 vol.10 前田育子—冬の始まり—

会期：平成 29 年 9 月 9 日（土）～平成 30 年 3 月 11 日（日）

《特集展示》

■苫小牧ランドスケープ 坂東史樹×佐竹真紀

会期：平成 30 年 2 月 3 日（土）～3 月 18 日（日）

《普及事業》

■美術館大学講座

対象：一般 登録者数：150 名

①入学式・「意識をつむぐ現代美術 世界・日本・北海道」

講師：上遠野敏氏（札幌市立大学 教授）

日：6 月 3 日（土）

②「支笏湖ものがたり—支笏湖学のすすめ—」

講師：若松幹雄氏（地図と鉱石の山の手博物館 理事）

日：7 月 15 日（土）

③「藤田嗣治 人と芸術について」

講師：佐藤幸宏氏（北海道立近代美術館 学芸副館長）

日：8 月 5 日（土）

④「[そうだ 南極 行こう—南極は苫小牧より暖かい?—」

講師：柴田和宏氏（苫小牧市立拓進小学校）

日：9 月 16 日（土）

⑤「北海道の鉄道と苫小牧軽便鉄道」

講師：渡辺真吾氏（鉄道史研究者・フリーライター）

日：10 月 21 日（土）

⑥「わが街の文化遺産 札幌軟石」

講師：杉浦正人氏（札幌建築鑑賞会 代表）

日：11 月 25 日（土）

⑦「アイヌ資料を科学の目でみる」



講師：宮地鼓氏（国立アイヌ民族博物館設立準備室 研究員）
日：12月16日（土）
⑧「ハスカップがつながる過去・現在・未来」
講師：小玉愛子（当館主任学芸員）
日：1月13日（土）
⑨卒業式・「縄文時代のゴミ捨て場？盛土遺構の最新見解」
講師：福井淳一氏（(公財)北海道埋蔵文化財センター 主査）
日：2月17日（土）

■博物館クラブ

対象：小中学生 登録者数：17名
①開講式・二枚貝の解剖
日：5月27日（土）
②ハスカップを食べてみよう（協力：出光興産苫小牧製油所）
日：7月22日（土）
③ガマでコースターをつくろう
日：8月19日（土）
④ライチョウのマスコットをつくろう
日：10月8日（日）
⑤昔の生活体験 火鉢と石炭ストーブを使ってみよう
日：11月11日（土）
⑥卒業式・土器の拓本をとってみよう
日：12月2日（土）、12月23日（土）

■子ども広報部びとこま

共催：NPO法人樽前arty プラス
対象：小中学生 登録者数：14名

■古文書解説講座

対象：一般 登録者数：24名

■ミュージアムラボ

対象：一般
①「ひらいてみよう！恐竜の玉手箱」
講師：大島光春氏
（神奈川県立生命の星・地球博物館主任学芸員）
日：4月29日（土・祝）
参加者：38名
②美術講座「Channel—時空をつなぐ彫刻表現—」

講師：松井紫朗氏（彫刻家・京都市立芸術大学教授）
日：8月12日（土）
参加者：25名
③羊毛マスコットのライチョウをつくろう
日：1月6日（土）
参加者：33名
④絵画鑑賞会（共催：美術館友の会）
日：2月11日（日・祝）
参加者：11名
⑤謄写版を使おう
日：3月24日（土）

■サイエンスカフェ@苫小牧

①「恐竜学最前線：超肉食ティラノサウルス」
講師：小林快次氏（北海道大学総合博物館准教授）
日：5月14日（土）
参加者：96名
②「おどろきの生き物はここ北海道にいた
～エゾサンショウウオとエゾアカガエルのすごい生き方～」
講師：岸田治氏（北海道大学苫小牧研究林）
日：6月24日（土）
参加者：22名
③こどもサイエンスカフェ「二酸化炭素のふしぎ」
協力：日本 CCS 調査株式会社
日：7月29日（土）
参加者：44名

■無料開放日

①ゴーゴーミュージアム
日：5月5日（金・祝）
参加者：1,145名
②文化の日無料開放日
日：11月3日（金・祝）
参加者：853名

■美術博物館祭 2017

日：7月28日（金）～7月30日（日）
参加者：2,935名

■見学会・観察会

①自然観察会「化石をさがそう」
日：8月20日（日）
参加者：16名
②親子見学会 フェリーを見に行こう
日：9月24日（日）
見学場所：苫小牧西港フェリーターミナルフェリー内他
参加者：34名
③歴史探訪「王子製紙の100年建築鑑賞会」
日：10月14日（土）
参加者：21名

■タンポポ調査事業

ご近所探検！植物探し～2017年フラワーズンに参加しよう～
日：5月13日（土）、6月18日（日）
参加者：12名

■郷土学習

期間：9月～12月
対象：市内小学校23校3・4年生

■教員のための博物館の日

共催：国立科学博物館／公益財団法人 日本博物館協会
後援：文部科学省
日：8月9日（水）
参加者：50名

■出前講座・講師派遣・アウトリーチ事業

日：随時
実施：12件

※各事業の入場者・参加者数は平成30年3月20日現在のものとする。
※展示事業一覧は、企画展名、開期、入場者数、関連イベントを記載。
※明記の無い事業の主催者は全て当館（苫小牧市、苫小牧市教育委員会）による。
※協力等は該当事業のみ記載。
※講師未記載は全て当館学芸員が担当。

**平成29年度
展示室の貸出し事業**

	展示内容	申請者	期間	来場者数 (主催者集計)	展示室
1	我が家の所蔵品展	苫小牧市美術館 友の会	平成29年3月18日 ～3月26日	2,202人	第1・2
2	新道展 苫小牧支部企画展	新道展 苫小牧支部	平成29年3月30日 ～4月4日	562人	第1・2
3	苫小牧美術協会春季展	苫小牧美術協会	平成29年4月6日 ～4月11日	662人	第1・2・3

当館では、「市民に開かれた美術館」、「文化芸術活動の拠点としての美術館」という基本理念に基づき、市内で創作活動の実績のある個人や団体等に発表の場を提供することを目的として、毎年1回、展示室の貸出し事業を実施しています。平成28年は2団体、平成29年は3団体に貸出しを実施し、主催者の意図したものが伝わった充実した展覧会となりました。

小泉 雅生（主査）

勇武津資料館通信

当資料館では、ふるさと歴史講座・ふるさと探訪・生活体験教室・機織り体験教室などの事業を実施し、ほかに出前講座などにも対応しています。

ふるさと歴史講座は3回開催され「勇払平野に残る戦跡」（1月）では、厚真町教育委員会の乾学芸員によって苫小牧市、厚真町、むかわ町に残る太平洋戦争当時のトーチカや塹壕が、写真や図で細かく紹介され、「勇払花暦（はなごよみ）」（2月）は美術博物館の小玉学芸員が勇払の植物を海浜、湿原・湖沼、空き地・造成地(代償植生)などの植物に分けて特徴を紹介し、「八王子千人同心と家紋Ⅱ」（3月）では2年ぶりに資料館の職員が「蝦夷地開拓移住隊士の墓」に3基だけある「家紋」について、特に「河西祐助知節妻梅（清涼院蓮室浄香大姉霊位）」に刻まれた二つの家紋「五三

桐」と「丸に六本矢車」についての解説があり、今後の調査も期待したいところです。

ふるさと探訪の植物観察会（7月）では、ここ数年、勇払の海岸を中心に観察を実施し、今回は勇払マリーナの西側を3地点に分割し調査しました。総体的にはレジャー客の踏み荒しが激しい部分もありました。確認された植物は、シャグマハギ・コメツブウマゴヤシ・オニハマダイコンほか9種で、海浜は、資料館付近の「緩やかな経年変化」ではなく予想のつかない激しい変化がみられ、今後同時期の調査が必要と、小玉学芸員が報告しました。

生活体験教室は、8回実施しましたが、昨年同様8月に実施した「藍染めに挑戦」は、定員をこえる25人の参加者で、「出前講座」で植苗小学校6年生の

教室としても実施し、大好評でした。11月の「根付」をイメージした「シカの角で携帯ストラップをつくろう」、2月の「布草履をつくろう」も大人気を博しました。

来年度は新規事業も増えていますが、特に「藍染めに挑戦」では藍の作付も増やし、多くの参加者に体験できるようにしたいと考えています。

二階堂 啓也（事務員）



シカの角で携帯ストラップ

コラム

特別展「柳原良平の海・船・港」

「駅を彩った幻の壁画」 ― 駅を彩った幻の壁画 ― 展覧会余滴



1986（昭和61）年1月28日苦小牧民報「壁画のある風景（3）」より

「サントリートリスのキャラクターの…」といえはわかる方も多い柳原良平ですが、無類の船好きとしても知られ、世界と日本の港をめぐり、船に関する幅広い仕事を手がけました。北海道にもフェリー会社の仕事や旅行などで港町を中心に何度も訪れています。展覧会では港町苦小牧ならではの視点で柳原の「船跡」を紹介しました。

さて展覧会が終わり、別の調べもので古い苦小牧民報をみていたときのこと、ふと一枚の写真に目がとまりました。苦小牧駅の待合室の壁面に、港町や船が描かれたパネルがはめ込まれています。写真は「壁画のある風景」のタイトルで、苦小牧にある壁画を写真とエピソードで紹介する連載記事の第三回目にあたる昭和61年1月28日の記事です。内容を読んでみると、そこにはまさしく柳原良平の名が。記事によると、縦210cm×横280cmの壁画は昭和60年2月1日発行の国鉄苦小牧駅「駅だより」第4号にその存在が紹介されているものの、いつ誰が何のためにどうやって待合室に飾ったか全くわからないものなそう。「この壁画のことを調べるために、当時の主席助役、工事助役、総務助役、工事担当者など各地に移った関係者、そして工事業者などに連絡をとったものの答えは同じ。当時の工事予算にも入っていないという（…）ただ壁画の右下にある“RYO”のサインと見覚えのある画風から柳原氏の作品というのはまちがいないさそうだ。」そして今その壁画はといえば行方知らず。長年苦小牧で生活をしてきた方々の間でも、壁画の存在自体を覚えている方もそう多くはないようです。ただ、この記事との出会いは柳原良平と苦小牧とのもう一つのつながりを発見する出来事になりました。壁画について何かご存知な方がいましたら、ぜひ情報をお寄せいただきたいと思います。

福田 絵梨子（学芸員／美術）

コラム

「氷期の生残者」

― 企画展「雷鳥・四季を纏（まと）う神の鳥」 ― 高橋広平写真展 ― を開催して



展示風景

雷鳥（ニホンライチョウ）、本州中部の高山帯に棲み、古来「神の鳥」とも呼ばれていた鳥類、外敵の生息域の拡大など環境変化の影響により著しく個体数が減少し、現在では絶滅危惧種IB種に指定された日本固有種……彼らの四季折々の姿を撮り続けた苦小牧出身の雷鳥写真家、高橋広平の写真展を、この冬開催しました。高橋氏は10年前に雷鳥に偶然出会いその姿に「一目惚れ」したといいます。その後独学で雷鳥の生態と写真を学び、まだ謎に包まれている雷鳥の生態と彼らの直面している過酷な状況を知り、翌年には仕事を辞めて山小屋で働きながら撮影を続け、2013年に第4回田淵行男賞岳人賞を受賞しました。現在も撮影の傍ら、写真展を開催したり雷鳥に関する講演を行うなどの活動を続けています。

北海道とは遠く離れた環境の下、導かれるように山に登り、シャッターを切り続けていた作家の眼差しは、まだ謎に包まれている雷鳥と彼らの棲む環境の『ありのまま』の姿を捉え写し出そうとしています。「野生生物や雷鳥のことをよく知ることができた」「心を揺さぶられた」などのご意見を数多くいただき、冬季にもかかわらず市内の方をはじめ、市外・道外からも多くのご来場がありました。「人は知ることによって変わることができる」高橋氏の祈りとも言える言葉の通り、一連の作品を通して写真家の眼差しと鑑賞者の視点が展示室で交差する瞬間、人の心や視点にも新たな変化が生まれたと感じています。

また本展では、地域の企業や学校、苦小牧写真連盟ほか多く団体・個人の方々のご協力のもと、高橋氏の母校である市立啓北中学校での講演会や、写真家、水越武氏との対談など、さまざまな事業を展開できました。生物が互いの生命同士お互いに複雑に絡み合い生態系を織り成しているように、人間も複雑な縁で繋がれ、次の世代へ歴史と文化を生み育てていくのではないかと、そのような風景が垣間見えた写真展でした。

小玉 愛子（主任学芸員／生物）

コラム

— 博物館でまなぶ — ミニ企画展「昔の道具〜火と人々の暮らし」

今年度の秋から冬にかけて、ミニ企画展として「昔の道具〜火と人々の暮らし」を開催しました。道具の変遷の歴史をたどりながら、人々の生活や文化を考えることを目的に、江戸から昭和期にかけて暮らしのなかで用いられてきた火に関係する道具を、「暖める」「照らす」「調理する」「消す・たたく」といった用途ごとに展示しました。

そもそも展示を企画するきっかけとなったのは、小学校への出前授業でした。事前に当館学芸員と教員が打合せをした上で、小学3、4年の社会科の教科書に登場する「羽釜」「ひしゃく」や、「下駄スケート」など苦小牧らしい道具を含む約20点の資料を学校に持参し、学芸員が使い方や形状についての解説を1点ずつ行ないます。当初は1校からスタートした「知る人ぞ知る授業」だったのですが、どうやら先生方の中でひそかに広まったようで、2月になると毎週のように我々はどこかの小学校へ出かけていきます。そうした状況をふまえ、少しでも子供たちが昔の道具の実物を見て学ぶ機会を増やそうと、市内の小学3、4年生が当館を訪れて社会科の学習をする「郷土学習」の時期に合わせて展示会を実施したのです。

郷土学習において、子供たちが展示を観覧する時間はわずかでしたが、展示資料の中に教科書やテレビで見たことがある道具を見つけて喜ぶ子、見慣れない道具に興味を持って使用法を尋ねてくる子、「前年度の昔の道具の出前授業のときに習った」と覚えていてくれる子もいて、学校の教科書だけでは学べないことを博物館で学ぶという点においては、一定の成果はあったのではないかと感じています。

今回は火にまつわる昔の道具を紹介しましたが、また機会があればこのような博学連携の事業を実施したいと考えています。

佐藤 麻莉 (学芸員 / 歴史)



郷土学習で来館する児童

ミニコラム コイノボリ大火関係資料について

大正10(1921)年5月1日、わずか2時間半のうちに繁華街や、学校・病院・役場などまちの主要施設が焼け、5300人が被災(うち1人死亡)、1007戸が焼失した火事が起こりました。この火災は「コイノボリ大火」と呼ばれ、5月の節句を前に各家庭であげていた鯉のぼりが火だるまとなって、乾燥した桝屋根の家々に落ちて延焼したためにその名が付けられています。

苦小牧町公立消防組が町に対して発

行した請求書の控え(当館所蔵)を見ると、大正10年3月30日を最後に請求書の発行が途絶え、同年12(11か)月4日から請求書の作成が始まっています。消防組の運営が元通りになるまでに数ヶ月を要したことから火災による被害の大きさが窺えます。

また、「忘るゝな5月1日 大火五週年記念」というタイトルで、大火の写真を貼付した台紙が近頃発見されました(画像参照)。これはレコード店や撞球場を営み、ご当地ソング制作の仕掛け人でもある岩井真三郎が大火の4年後に作成したものです。この資料については不明な点が多いのですが、災

害を教訓に人々の防火意識を高めようとする意図が感じられます。いずれも、苦小牧で最大の損失をもたらした火事の恐ろしさを後世に伝える資料です。

佐藤 麻莉 (学芸員 / 歴史)



岩井真三郎制作の台紙付き写真

埋文センター活動報告

苦小牧市埋蔵文化財調査センターは前身の組織が発足してから今年で45年になります。現在は美術博物館に併設されており、市内の遺跡の発掘調査、出土品の整理保管を行っています。苦小牧市は現在の市街地に遺跡があまりないため、発掘調査を行っている光景を見る機会はなかなか無いかと思いますが、実は市内には291ヶ所の遺跡が確認されています。現在でも雪の無い春から秋にかけて市内のあちこちで調

査が行われています。特に苦東地区や新千歳空港の南側の美沢地区で大規模な発掘調査がこれまで行われてきました。出土した土器や石器、動物の骨などは、全てセンターで清掃、番号付け、図面化が行われて保管されています。その総数は数え切れないほど膨大なものとなっていますが、美術博物館での展示や研究者への資料の貸し出しなどに活用されています。

今年度も市内で5地点の調査が行われ、新たに6つの遺跡が登録されました。今後もこのスペースから埋文セン

ターの活動を報告していく予定です。皆さまに苦小牧の埋蔵文化財の豊富さ、奥深さが伝われば幸いです。

岩波 連 (学芸員 / 考古)



発掘風景

館長コラム

今年度の展示会について

今年度の展示会は、博物館や美術館、企業、学校、市民団体、作家との連携協力による地域ならではの特色がある開催となりました。「恐竜の玉手箱」展では、神奈川県立生命の星・地球博物館より恐竜の教育用標本の借用と展示作業にも携わっていただくなど全面的なご協力をいただきました。また、地元企業との連携では、トヨタ自動車北海道株式会社主催による「水から未来を紡いで

20世紀美術の創造」絵画展の開催や出光興産株式会社による特別展と連動したコンサートの開催、港湾関連企業の協力をいただいた特別展「柳原良平の海・船・港」など港湾産業都市として発展する苫小牧市らしい開催となりました。このほか、写真展「雷鳥・四季を纏う神の鳥」では、作家の母校での講演会「おかえり先輩」や対談などをはじめ、企業や学校、同窓生、文化団体の協力により各種の事業を開催することができました。また、開催期間中にボランティア団体との共催で視覚に障がいのある方への鑑賞会

の開催も実施することができました。

美術博物館は、リニューアルしてから節目となる5年目を迎えました。これまでの展示事業を振り返り課題や反省点を1つ1つ解決しながら、今後も、郷土の自然、歴史、考古、芸術についての調査研究成果を基本とした展示構成をし、地域について、楽しみながら学び、知識を深め、知的探究心や感性、愛郷心を育む展示事業を企画していきたいと思えます。

荒川 忠宏（館長／地質）

平成30年度 展示会情報

特別展

■ 歌川広重 二つの東海道五拾三次
保永堂版×丸清版展
平成30年7月14日（土）～9月17日（月・祝）

中庭展示

■ vol.11 大森記詩
平成30年5月5日（土・祝）～9月17日（月・祝）

■ 藤沢レオ（藤沢レオ展関連展示）
平成30年10月6日（土）～平成31年3月3日（日）

■ 美術博物館祭 2018
平成30年7月27日（金）～29日（日）

企画展

■ 風の生涯と勇払
平成30年4月28日（土）～7月1日（日）

■ 藤沢レオ—Still Living—
平成30年10月6日（土）～12月2日（日）

■ 美々鹿肉缶詰工場展
平成30年12月15日（土）～平成31年3月3日（日）

収蔵品展

■ 野を舞う～廣田良二 蝶コレクション展
平成30年4月28日（土）～7月1日（日）

特集展示

・ 第1期
平成30年7月14日（土）～9月24日（月・祝）

・ 第2期
平成30年12月8日（土）～平成31年3月3日（日）

*展覧会の名称及び内容、時期等は予告なく変更する場合があります。ご了承ください。

収蔵資料紹介

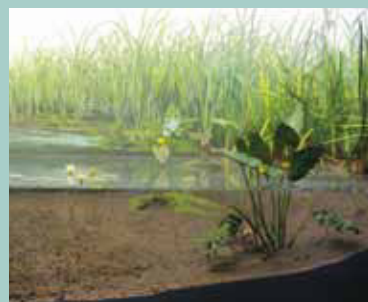
展示室から

水草

水域に咲く「水草（水生植物）」の世界をのぞいて見ましょう。普段は目立たない水草たちですが、魚や鳥の産卵場所・隠れ場所などとして生物の命を支えている、かけがえの無い存在です。苫小牧や周辺の湖沼では多くの水草を観察できますが、環境の変化によりほとんど観察できなくなった

種もあります。水草は生活型のタイプにより「抽水」「浮葉（根を水底に張り、葉を水の上に出す）」「浮遊（水面に浮かぶ）」「沈水（植物全体が水中に沈む）」の4種類に大きく分かれています。このジオラマでは、普段なかなか観察できない「水草の生活」を、魚になった気分で観察することができます。

小玉 愛子（主任学芸員／生物）



表紙の写真

坂東史樹《苫小牧埠頭No.1 倉庫（インスタレーション《その仔犬をポケットに入れよ、旅を続けよう》より）》（2015）

平成29年度、新たに収蔵となった本作は、「NITTAN ART FILE:インスピレーション」を機に制作されたインスタレーション作品5点のうちの1点。作者の坂東は、苫小牧の夜景のイメージを源泉としながらそこに現代人の心象を象徴的に投影しています。光に彩られた精巧なその模型は、苫小牧という都市のもつ循環するエネルギーを彷彿とさせると同時に、私たち現代人が抱く多幸感や孤独など相反する感情、そして現代社会に生きる人間存在の有り様を照らし出すかのようです。

細矢 久人（主任学芸員／美術）

■ 編集後記 美術博物館だよりも5号目となりました。今年行われた展示の背景や裏話など様々な記事を学芸員が執筆しました。お楽しみ下さい！

岩波 連（学芸員／考古）

苫小牧市
美術博物館だより

平成30年3月31日発行・第5号
編集・発行：苫小牧市美術博物館 〒053-0011 苫小牧市末広町3丁目9-7
TEL 0144-35-2550 FAX 0144-34-0408
URL <http://www.city.tomakomai.hokkaido.jp/hakubutsukan/>